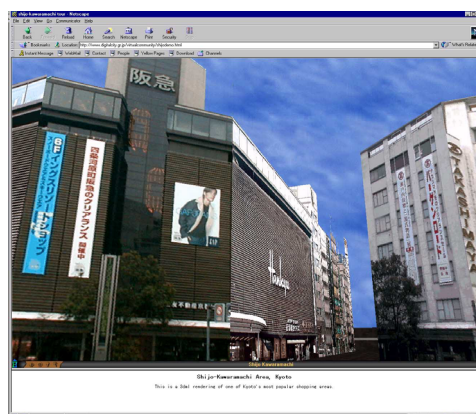


デジタルシティ京都(石田亨)

1997 年の Social Interaction and Communityware のワークショップに Peter van den Besselaar がやってきた。Digital City Amsterdam のプレゼンに、社会情報学の鮮やかな姿に、目から鱗が落ちた。翌年、情報学研究科が生まれ、社会情報学専攻がスタートする。丁度その頃、NTT コミュニケーション科学基礎研究所ではオープンラボの企画が持ち上がった。当時の研究部長の服部先生（現在立命館）から、やってみないかとお誘いを受けた。テーマを考えたときに頭に浮かんだのが、デジタルシティだった。

1998 年 10 月、NTT オープンラボでデジタルシティが発足した。地図をベースにした GeoLink、京都の仮想都市などの開発が始まった。研究成果の見通しは、これっぽっちもなかった。企画書の書けない研究を認めていただいた NTT に感謝している。方向性は正しいと自分の勘を信じた。デジタルシティが注目を集めたのは、Stefan が作った河原町四条の 3D があったからだと思う。こんなに簡単に仮想空間が作れるのかと興奮した。四条繁栄会に持ち込むと驚きの声が上がった。実は Stefan は仮想二条城に興味があったのだが、無理を言って河原町四条を作ってもらった。最終的には街との接点ができたと喜んでくれた。GeoLink も神戸大の田中先生（現在京大）を訪れて指導いただいた。平松さん（NTT）の博士論文が完成してほっとした。



1999 年 10 月から、デジタルシティ京都実験フォーラムが始めた。芝蘭会館での立ち上げの会議には、デジタルアーカイブ研究センターや京都新聞社も参加して下さった。フォーラムのメンバーは 100 名を越した。自治体、大学、企業、商店街、新聞社、寺院、ボランティアなど所属も多様、動機も多様だった。小山先生（当時博士課程学生）や平松さんがオーガナイザを引き受けてくれた。ワーキンググループと称して数ヶ月毎にミーティングを実施した。いつも 50 名程度が集まり、討論の後、酒を飲む.....高台寺で夜桜を見ながら議論したこともあった。新しい企画はなかなかうまく行かなかったが、交流の意義は大きかった。京都という街が少し分かったような気がした。

しかし、2 年間を期限とした実験フォーラムは、NPO の立ち上げを果たせず終結してしまう。2001 年に野村さん（現在 UCSD）がデジタルシティ特集を bit に組んでくれた。それがなんと 30 年続いた bit の最終号になった。その後、JST デジタルシティプロジェクトが始まった。先端技術研究に焦点を当てた 5 年間のプロジェクトだ。全方位カメラ、仮想空間、エージェントなどに、研究室の技術が生きている。